

アラビア語の修辭動詞について

中江 加津彦

1. はじめに

英語では *may, must, can* などという助動詞が、動詞とは別に語類 (word class) として存在するけれども、アラビア語では助動詞という語類は存在しない。存在するのは動詞 (類) という語類だけである。この動詞 (類) が一定の統語的条件のもとに助動詞として機能することがあり、これを助動詞とすることができるだけである。つまりアラビア語では助動詞が語類として存在するのではなくて、動詞という語類、つまり動詞類 (verbal class) の中の種として存在するということができる。本論ではこの動詞類の中に種として現れる助動詞について述べる。

表題の「修辭動詞」という用語について、はじめに述べておく。「助動詞」という用語は誤解を招きやすいので本論では避け、本論では Peled (1989) が用いている「修辭動詞 (modifying verb)」という用語を用いて、動詞 (類) の修飾的用法のことを説明することにする。「助動詞」という用語を用いると、「動詞 (類)」という語類とは別に、「助動詞」という語類があたかも存在するというイメージを与えてしまい、紛らわしいからである。語類の分類としては、アラビア語における「助動詞」は種として「動詞類」に含まれてしまうので、以下本論では「助動詞」という用語は用いず、「修辭動詞」という用語を用いることにする。さらに補助動詞的性質を考慮すると、この名称を選んだ理由がはっきりとしてくる。

文語アラビア語の修辭動詞は、現代文では多分に補助動詞的性質が強い。補助動詞というのは他の動詞 (本動詞) に付属し、本来の具体的意味を失いつつ、抽象的な意味を本動詞に加える一方で、その補助動詞は独立して、本動詞として用いられることがあるものである。例えば日本語 (古典) で「着させたまふ」は *ki-sase-tamau* と分節され、*ki* は動詞 (語幹)、*sase* は使役 (または尊敬) の文法的意味を表す助動詞、*tamau* は補助動詞で「敬語」として用いられている。この補助動詞 *tamau* は、本来本動詞として

「与える」の意味で用いることができる。これは動詞が一定の統語的環境で補助動詞として用いられている一つの例と言える。アラビア語の場合もこの日本語の補助動詞と平行した現れ方になる。ここで *sase* を助動詞と説明したが、これは独立して動詞として用いられることがないゆえである。日本語ではこのように助動詞と補助動詞が両方あって、その区別は形態の独立性が基準になっている。それに対してアラビア語では、いわば助動詞がなく、補助動詞だけが（正確に言えば、意味上で補助動詞的に機能する動詞が）あると言うことができる。

アラビア語ではこのような助動詞の持つ文法的意味を表そうとすれば、動詞の持つ語形を変化させた派生形という形態によって表現する。例えば、

'alima (know) → 'allama (teach ⇄ make someone know)

kasara (break tr.) → inkasara (break intr. ⇄ be broken)

使役を表す一つの方法として、第2子音を重ねる方法があり、受け身を表す一つの方法として、*in*という接頭辞を付けて動詞の語形を変化させる。これらは生産的な動詞の語形態であって、派生形と言われている。この他にも小詞を用いたり、場合によっては補助動詞的用法のみの動詞を用いることもあるが、いわゆる「助動詞」というものは存在しない。

それならば修辭動詞という用語を用いずに、ここで補助動詞という用語を用いればよいと思われるかもしれない。それでも、ここで補助動詞を用いずに修辭動詞を用いたのは、この種の動詞は後続動詞を従える補助動詞的用法だけであればいいのだが、動詞が後続しない（動詞以外が後続する）場合〔後に示す例文(5)(6)(7) など〕にも用いられることがあるからである。そう言った場合を含めて、動詞類という語類の中でこの種の動詞を一つのカテゴリーとしてくくることになるので、補助動詞ではなく修辭動詞としたのである。

1. 1 本論の目的

本論では、アラビア語で「助動詞（修辭動詞）」として分類されてきた、*kaana*と'*axawaatu kaana* (*kaana*の姉妹たち)について再考を試みる。特に、動詞'*aada* (本来の意味は「戻る」)の分類をめぐって、アラビア語における「助動詞（修辭動詞）」というものについて考えてみる。これまで、この'*aada*は'*axawaatu kaana*に含まれるものと考えられてきたが、その成り立ちや統語的・意味的機能からみて、「助動詞（修辭動詞）」の

中でも別の枠でとらえるべきであるということを本論で述べる。

アラビア語に、統語範疇としての修辭動詞が存在するかどうかについての議論は、多くなされてきた (Bravmann1953, Beeston1970, Stetkevych1970, Peled1989:256, 6-8など)。統語範疇としての修辭動詞を口語アラビア語に認めるかどうかについては、Jelinek(1983), Eisele(1992)などの議論がある。文語アラビア語については、最近ではPeled(1989)が修辭動詞の持つアスペクト・マーカとしての役割を詳述し、助動詞というよりも修辭動詞(modifying verb)としての範疇を認めている。

第2章でアラビア語における修辭動詞の現れ方について述べ、第3章で修辭動詞の種類分けを行い、第4章で修辭動詞とhaalとの関わりについて述べ、第5章でアラビア語における構文という点から修辭動詞について述べ、第6章でアラビア語の語類 (word class)における修辭動詞の分類について述べ、第7章でまとめる。

1. 2 前提

本論にはいる前に、本論での議論の基盤について、ここで述べておきたい。1. 1で述べた通り、Steele et al.(1981); Jelinek(1983), Eisele(1992)がアラビア語(彼らは特にエジプト方言をあつかっている)に「助動詞」が存在するかどうか、文法範疇としてそれを認めるかどうかを議論している。彼らが議論している基盤は、もっぱら統語レベルに限られた議論であって、しかもそれはAUXという非常に特異性のある、極度に抽象化された概念を、範疇として認定しようとする議論となっている。例えば、Eisele(1992:148fn)がJelinek(1983)の考えに反論する文脈で用いているAUXの特徴などをみれば、このAUXという概念(Pullum1977, McCawley1988)が、統語概念であるだけでなく、英語及びその系統の言語にみられる非常に特異な概念であるということがわかる。例えばSubject-Auxiliary inversion, Tag formation, Negation placement & Do-support, Negative construction, Auxiliary reduction, Adverb placement, V' deletionなどといったAUXの特徴は、どれも英語に特異なもので、アラビア語にはあてはまらないものばかりである。それはアラビア語の「助動詞」の概念が、統語上の概念(統語範疇)に限られたものではないからである。AUXが存在するかどうかの議論を、英語及びその系統の言語で行うのならばまだしも、こういった非常に特異性のあるAUXの特徴をもって、AUXがアラビア語にあるかどうかを議論することは、土台

無理な話である。いずれにしても、AUXというものを普遍的概念として一般化していかうとするのは、むずかしいことであろうと私は考えている。

こういった普遍的概念をめざす議論の基盤と、本論で私が議論する基盤とは、基本的に異なるものである。本論では、助動詞というものを形態・統語論的基盤でとらえている。つまり、まず「語」としての動詞があり、それが一定の統語的条件でのみ助動詞的に機能するという事例の研究である。よって、本論での問題は、別の言語に基づいて作られた既製の語彙範疇があてはまるか、統語範疇があてはまるかという議論に答えを出すことではない。

統語範疇というものは、文を形成する統語単位としてくりだされた抽象的な単位であり、それをもって普遍文法の基礎となる範疇の一般化に向けて議論することは、それだけでそれなりにまとまりのあるものであり、興味を持ってないことはない。しかし、やはりそれぞれの言語にはふさわしい分析方法というものがある、それを見いだそうと試行錯誤を繰り返すことが、言語研究では大切であると私は考える。その妥当な分析方法を見いだそうとする過程で、特定の一言語に基づいて作られた片寄った既製の概念を、さほど相対化もせずに、他の言語、しかも異系統の言語にあてはめていこうすることにはかなりの無理がある。理論が理論として、特に普遍理論をめざす立場で、一定理論を様々な言語の各事例に照らして、理論に修正を加えながら、完成されたものを理想として前進しようとする考えはそれなりに興味深く、関心を持ってなくはないものである。しかし、それも本当の意味での理論の修正ならまだしも、理論を理論として成り立たせるための建前が先行して、理論を無理にあてはめようとするがために、対象となる言語の持っている特徴を見落としてしまったり、理論にとって都合のよい面しか分析者の目に写らなくなっていることが多々見られる。けれども、そういった見落としてはならない各言語に特異な特質をも含んでこそ、言語の分析として完成されたものに近くなるのではないかと私は考えている。

しかし、私はこのような普遍理論の研究の立場は取らない。一つの言語を研究対象にしてみる場合、私は民族のもつ言語というものを民族固有の伝統の基盤となる、概念化・概念化・論理などが反映された一つの「民族言語」としてとらえている。通文化的な面は認めつつ、かつその文化の固有性、つまり民族（言語）独自の固有性を可能な限りはっきりとさせていこうという考えを私は持っている。よって、本論でアラビア語伝統文法学を私が随所でよりどころとしたのは、このような私の言語研究としての立場が反映

されたものである。つまり、「語」の議論を始めるのにまず統語論から始まるような分析には疑いを持つ。もちろん統語的環境というものを全く考慮しないわけではなく、あくまでも形態論的観点で言う「語」から始めて、つまり対象言語(ここではアラビア語)ではどのような種類の「語」を認めているのかということから始めて、その語が様々な統語的環境で、どのような扱いを受けることになるのかという傾向性を(伝統文法などに照らしながら)文法として記述する点に私は研究の基盤を置きたい。

2. 導入

ここではアラビア語の修辞動詞の現れ方について簡単に説明する。まず、アラビア語の文について簡単に説明しておく。アラビア語には名詞文と動詞文という二つのタイプの文がある。名詞文はいわゆるS Vの語順となり、動詞文は逆にV Sの語順となる。例をあげる。

<u>dhahaba</u> al- <u>talabat</u> -u.	⇒動詞文
go pf DET-students-NOM (the students went)	
al- <u>talabat</u> -u <u>dhahaba</u> .	⇒名詞文
DET-students-NOM go pf (the students went)	

アラビア語伝統文法学ではそれぞれの文は次のような構成とされている。(詳細は Levin 1985を参照)

動詞文 =al-fi'l + al-faa'il

[The subject of a verbal sentence is called al-faa'il (the agent), and its predicate al-fi'l (the action or verb).]

(Wright 1964 II 251, 17-19)

名詞文 =al-mubtada' + al-xabar

[The subject of a nominal sentence is called al-mubtada' (that with which a beginning is made, the inchoative), and its

predicate al-xabar (the enunciative or announcement).]
 (Wright 1964 II 251, 14-17)

なお文語アラビア語では名詞に3つの格を持つ。主格(NOM)、属格(GEN)、対格(ACC)で、それぞれの格語尾は-u, -i, -aで示される。動詞は時制(tense)を形態として持たず、相(aspect)のみを持つ。アラビア語には完了形(perfect=pf)と未完了形(imperfect=impf)という2つの相があり、例えば順にfa'ala, yif'alu といったような2種類の動詞の語形態を持ち、語の形態から相は区別される。[ほとんどの動詞が3子音で構成されており、通例 f, ' , l で語形態を示す。]

アラビア語の学習文法書の中に、助動詞(Auxiliary) や修辭動詞(Modifying verb) といった文法用語が用いられていることは実際はほとんどない。しかしアラビア語の文章を読むと、次のような文を非常によく見かける。

(1) 'asbahat MV pf	'ahaadiith-ii la-ki	t ^u fla ^t -an laa	taludhdhu interest impf	la-ki
	stories-my	to-you child-ACC not		to-you

al-aan-a.

DET-time-ACC

(My stories to you when you were a child do not interest you now.)

(Cantarino 1975 III:256)

この文での完了形動詞'asbahatは、あとに実質的・具体的な意味を持つ動詞taludhdhuを未完了形で従えており、意味上も「～になる」という、アスペクトとしての意味特徴を持っている。この'asbahatは意味上具体性には欠け、単独では不完全な意味を持っているところから、完全動詞(full verb)としてではなく、修辭動詞(Modifying verb)として働いているとみることができる。つまり修辭動詞 'asbahat は、ここではアスペクト・マーカーとして働いているのである。

次のような文に現れる動詞‘aadaも、修辭動詞とみなしていいかどうかが問題になる。

(2)	'aada MV pf	'umar-u wa	kataba-hu. wrote -it pf	(Omar wrote it again.)
-----	-------------------	------------	-------------------------------	------------------------

この文での‘aada は、初級のアラビア語学習者がよくつまづくものである。この‘aada（本来の意味は「戻る」）は、例文(1)のように未完了形を従えず、接続語waによる一種の等位接続された文（節）を従えており、よってこの‘aada は統語上は完全動詞として機能しており、一見2つの節を別々に解釈（「オマルは戻って、再び書いた」）できそうである。しかし意味上は、等位接続された2番目の文（節）の動詞kataba（‘aadaと同様に完了形）と一体になった意味（再び書いた）をなすので、これも修辭動詞とすることができる。本論ではこの種の修辭動詞と、例文(1)のアスペクトを表す修辭動詞とは別々に分析することになる。

このように例文(1)の‘asbahatに対して、例文(2)の‘aadaも修辭動詞に含めていいかどうか、また含めるならばどのように分類するのが妥当かが本論での議論を起こすきっかけになった。

なお本論で問題にしている修辭動詞は法(Mood)と直接関係がないものと私は考えているので、本論では法については触れない。アラビア語における法については別の機会にまとめることにする。

3. 修辭動詞の種類

ここではどのような動詞が修辭動詞として用いられるのかを見ていく。この種類の動詞は、アラビア語伝統文法で言うkaana と ‘axawaatu kaana（直訳は「kaanaの姉妹たち」）の二つに相当する。（この分類の詳細についてはLevin1979を参照）

kaana はここでは、説明の便宜上簡単に言えば、（実際は、本質的に性質は異なるが）

英語のbe動詞にあたるようなものと言っておく。例えば

kaana zayd-un qaa'im-an.

MV pf Zayd-NOM standing-ACC (Zayd was standing)

(kaana についての詳解はBeeston1984を参照)

'axawaatu kaana については次の3. 1で説明する。

3. 1 'axawaatu kaana について

Wright(II-101ff)によれば'axawaatu kaana は「単なる存在の意味に、状況などの修辭的意味を付け加えたものである」とされる。(「kaana とその姉妹たち」というこの分け方については、本論で後に確認することになる。) Wrightはこの'axawaatu kaana を、次のように4つに分けている。

- a) 持続または継続
(duration or continuity) 例. daama, baqiya など(〜で続ける)
- b) 変化または転化
(change or conversion) 例. saara, raja'a など(〜になる)
- c) 時間
(time) 例. zalla, baata, 'asbaha など(〜なる)
- d) 否定
(negation) 例. laysa など(〜ではない)

この分類は、こういった修辭動詞の後に副詞的補語を従えるものだが、こういった修辭動詞がさらに別の動詞を後続させて、補助動詞的に用いられる場合がある。その場合の'axawaatu kaana をWright(II-106, 12)は'af'aalu al-muqaarabat-i (近接の動詞)と呼んでおり、Wrightはこれをアラビア語伝統文法学に従って、さらに3つに分類している。

- 1) 述語の示す意味に単に接近していること (いまにも～しようとしている)
 (the simple proximity of the predicate) ex. kaada, 'awshaka, karaba など
- 2) 述語の示す意味の実現を予期 (おそらく～であろう)
 (a hope of its occurrence) ex. 'asaa, haraa など
- 3) 開始の動詞 (～し始める)
 (the verb of beginnings) ('af'aalu sh-shuwuu'-i, 'af'aalu l-'inshaa' i)
 ex. 'axadha, ja'ala, shara'a, tafiqa, 'aqbala など

Wrightがa)~d) に分類した動詞も、意味はそのままで、1)~3)のグループと同じように動詞をあとに従えて、補助動詞的に用いられることも実際にはよくある。本論で主として問題にしているのは、この'af'aalu al-muqaarabat-iのように、動詞をあとに従えて補助動詞的に用いられる修辭動詞である。

3. 2 アラビア語における3つのグループの修辭動詞

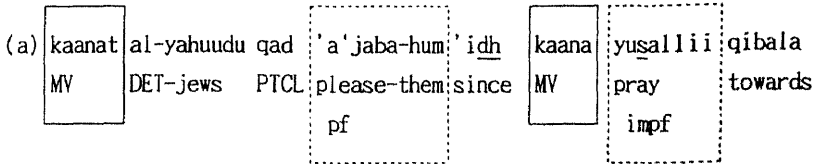
アラビア語の修辭動詞は、他の動詞を後続させる場合、いくつかのグループに分けることができる。というのも現代の文語アラビア語で見た場合、常に修辭動詞として用いられるもの、完全動詞と修辭動詞両方で用いられるもの、また後続動詞の接続に接続語waやfaを用いなければならないもの、直接修辭動詞に接続させるものがあるからである。

そこで本論ではアラビア語の修辭動詞をその統語形式と意味機能という点で、以下のように(a)(b)(c)の3つのグループに分けて考える。統語形式が完全動詞というのは補助動詞的用法ではないということで、統語形式が修辭動詞というのは補助動詞的用法であるということである。同様に意味機能が完全動詞というのは補助動詞的な意味を持たないということで、意味機能が修辭動詞というのは補助動詞的な意味を持つということである。(a)と(c-1)は完全動詞としても修辭動詞としても用いられることがあるが、(b)は修辭動詞としてのみ、(c-2)は完全動詞としてのみ用いられている。ただし(c-2)は完全動詞として用いられていながらも、修辭動詞の意味機能を持つというものである。

< 統語形式 > < 意味機能 >

- (a) 完全動詞 → 完全動詞
 修辞動詞 → 修辞動詞 [+ tense ,(-aspect)]
- (b) 修辞動詞 → 修辞動詞 [(+ tense), +aspect]
- (c-1) 完全動詞 → 完全動詞
 修辞動詞 → 修辞動詞 [(+ tense), +aspect]
- (c-2) 完全動詞 → 完全動詞
 完全動詞 → 修辞動詞 [(+ tense), -aspect]

以下にそれぞれの例文とその分析を記す。

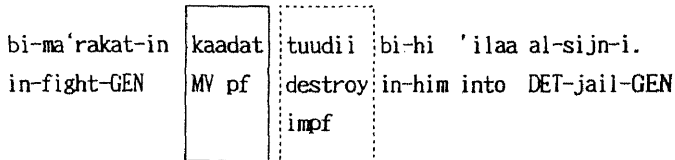


bayt-i al-maqdis-i
 house-GEN DET-holy-GEN

bayt maqdis = Jerusalem

(The jews -- he pleased them, since he prayed towards the temple in Jerusalem) (Khan1988:9)

- (b) jarraba hazza-hu marrat-aini fa-intahaa fii kull-i marrat-in
 try luck-his time-DUAL and-end in every-GEN time-GEN



(He tried his luck two times but every time he ended in fight which led him into the jail.)

(Nagiib Mahfuuz / Bidaaya wa Nihaaya:118,7-8)

(c-1)	ja'alat	tatasaa'alu	fii nafs-i-haa	"maadh ^h aa fa'al-tu
	MV pf	think impf	in self-GEN-her	what do-I

bi-nafs-ii ? "

in-self-my

thumma	'axadhat	ta' lafu	al-zulmat-a	ruwayd-an.
then	MV	be-used-to	DET-darkness-ACC	slowly-ACC
	pf	impf		

(She began to think in her mind, "what did I do by myself?", then she began to get used to the darkness slowly.)

(Nagiib Mahfuuz / Bidaaya wa Nihaaya:102,8-9)

daa'afa min	'aalaam-i-haa	'anna-hum	baatuu	laa:	yashba'uuna	'illaa	
make	of	pains-GEN-her	that-they	MV pf	not:	satisfy	except
double					impf		

fii l-'a'yaad-i.

at DET-festivals-GEN

(It made her more painful that they no longer satisfy their appetite only at the festivals.)

(Nagiib Mahfuuz/Bidaaya wa Nihaaya:114,4)

(c-2) thumma 'aadat wa qaalat ~ (then she continued ~)
 then MV pf and say pf (Cantarino 1975 III:18)

(a)のグループはkaanaだけで、修辞動詞としても完全動詞としても用いる。修辞動詞としては、動詞（完了形及び未完了形）を後続させることによって、複合動詞と言ってよいようなもの（これについては5. 3で述べる）を形成し、テンス・マーカ―として機能する（3. 3参照）が、完全動詞として用いると「存在」の意味を表す。(b)(c)が、'axawaatu kaanaと分類されてきたものに相当する。(b)はkaadaを代表とするグループで、用いられる時は必ず未完了形動詞を伴い、修辞動詞としてのみ用いられる。この例文中のkaadaは「今にも～しそうな」という意味になり、このグループの修辞動詞は一種のアスペクト・マーカ―として用いられる。(c)はふつう完全動詞で現れる動詞が未完了形動詞の接続を条件として、修辞動詞として用いられるグループである。(c-1)には例文(1)が含まれる。これはja'alaや'asbahaを代表とするグループで、未完了形動詞を後続させると修辞動詞となる。このグループの動詞は、起動相(inchoative)などのアスペクトを持つ。もちろん完全動詞として用いられ、具体的な意味を持つこともある。(c-2)には例文(2)が含まれる。これは'aadaを代表とするグループである。このグループの動詞は、統語上は完全動詞として用いられているにもかかわらず、wa節(waによる等位接続または後に記述するwaを伴うhaal節)が後続すれば、修辞動詞としての意味機能('aadaの場合「再び～する」)を持つものである。ただし、wa節を伴わない場合、完全動詞としての意味(「戻る」)で用いられることになる。つまり、意味機能にかかわらず、統語上は常に完全動詞として用いられているものである。

(c-2)に関する例文を、さらに付け加える。この種の動詞には'aadaだけではなく、'ajaaba(完全動詞としての意味は「答える」)なども含まれる。

(3) 'ajaaba wa qaalat la-hum ~ (In reply, he said to them ~)
 MV and say to-them
 pf pf (Cantarino 1975 III:18)

この例文は抽象的な意味特性(semantic feature)を文中で先行させている構文の例と言える。次の例文は'aada を用いたものであるが、(c-1)と同様の用いられ方をしたものである。

(4) 'aadat	taquulu	bi-huduu'-in. (She quietly spoke again.)
MV	speak	by-quietness-GEN (Cantarino 1975 III:258)
pf	impf	

このように現代文では接続語waを用いた等位構造をとらないで、'aada の直後に未完形を接続することがたまにある。

3. 3 修辞動詞テンス・アスペクトについて

ここでは、アラビア語伝統文法学でなされてきたkaanaと'axawaatu kaanaという分類について、そのテンス・アスペクトという意味機能の観点から検討することにする。

アラビア語の修辞動詞は、3. 2で述べたように三つに分けることができる。(a)はkaanaで、(b)(c)は'axawaatu kaanaにあたる。第2章で分けた3つのグループをテンス・アスペクトという観点から見れば、(a)はテンス・マーカーとしての機能を持ち、(b)(c)はアスペクト・マーカーとしての機能を持つところから、(a)は(b)(c)と区別される。(b)(c-1)と(c-2)は統語上のふるまい方からはっきりと区別される。(b)と(c-1)については(c-1)が完全動詞として用いられる場合を除けば、同じ現れ方である。もちろん(b)(c)もテンスを持たないわけではないが、テンスとしての意味機能を持つのは(a)のkaanaだけである。

まず(a)に属するkaanaのテンス・マーカーとしての働きを見るために、次の文を比較してみるとよい。

kaana	yaktubu	(He <u>was</u> writing)	kaana	kataba	(He <u>had</u> written)
∅	yaktubu	(He <u>is</u> writing/writes)	∅	kataba	(He <u>has</u> written /wrote)

この2つの文の比較(一種のminimal pair)から、kaanaの持つテンス・マーカ―としての機能がはっきりとする。

次に修辭動詞のアスペクト・マーカ―としての働きを見るために、次の文を比較してみる。

'asbaha yaktubu (He began to write)
 ø yaktubu (He is writing/writes)

この2つの文の比較から'asbahaの持つアスペクト・マーカ―の機能(ここでは起動相)がわかる。

次に記す例文(6)(7)は、動詞を含まない例文(5)にkaana, 'asbahaがついたものである。この場合も上で述べたように、例文(6)のkaanaはテンス・マーカ―としての機能を持ち、例文(7)の'asbahaはアスペクト・マーカ―の機能を持っている。

(5) la-haa hadaf-un.
 to-her purpose-NOM (She has a purpose.)

(6) kaana la-haa hadaf-un.
 MV pf to-her purpose-NOM (She had a purpose.)

(7) 'asbaha la-haa hadaf-un.
 MV pf to-her purpose-NOM (She came to have a purpose.)

まとめると次のようになる。

kaana ----- tense - ø - marker
 'axawaatu kaana ----- ø - aspect - marker

kaana と他の動詞('axawaatu kaana) は、このようなテンス・アスペクトという意味機能の分析から、区別されることになり、この二つを分けてきたアラビア語伝統文法学における分類は正しいということになる。つまり修辭動詞はアスペクトという意味機能を持つか持たないか、逆に言えばテンスという意味機能を持つか持たないかで、二つの種類に分かれてしまうことになる。

ここではkaanaと'axawaatu kaanaはテンス・アスペクトによって分けることができるということを示した。この二つは、またwa節を取ることができるかどうかによっても、はっきりと分けられる。アラビア語伝統文法学では、分類は直感に頼っているところが多いが、その直感は統語的・意味的分析によって正しいことが証明できるのである。

3. 4 修辭動詞の成立の要件

3. 2で分類した(a)のkaanaは、未完了形だけではなく、完了形も従える。一方kaanaという修辭動詞、つまり(a)の場合を除けば、意味上で修辭動詞としての機能を担う要件は、未完了接続となっていることが分かる。(この接続の仕方もkaanaが他と異なるということを示している。)

この修辭動詞に後続する未完了形動詞は、Stetkevych(1970:100)によれば、文意に状況的・付加的意味を付け加えるhaal節の一種とされるものである。本来haal節には接続語(conjunctive)であるwaが付いており、その場合修辭動詞が完了動詞であれば、waのあとに続く動詞も完了形で現れるのが普通である。ところがこの未完了形動詞はStetkevychによれば、waが落ちて、waに続いていた完了動詞が未完了形になり、その未完了形動詞が後にwaの付かないhaal節として一般化したものというわけである。つまり(c-2)の'aadaの場合、その古いwa-haal節(waをともなうhaal節のことを以降wa-haal節と記す)が保持されていることになる。この理由は多分に完全動詞として本来持っていた方向性などの特定の意味の特徴(semantic feature)があるゆえに、修辭動詞とは言っても完全なアスペクト・マーカーになれなかったからであろうと考えられる。(この点については、後に検討する。)さらに、Stetkevych(1970:99)の言うように、翻訳からくる影響もあったと思われる。つまりStetkevychによれば、本来フランス語のne-plusをアラビア語に訳す時に、否定辞を伴う'aadaを用いたとされ、それがアラビア語の文体に影響を与えたとされている。そのような翻訳の影響ゆえに古い形が残ったとみれば、これも興味深い現象ということができる。いずれにしても、ここで修辭動詞の機能と

haal節との密接なつながりを見ることができる。

このことは、動詞を含まないhaal節を従える修辞動詞があることから裏付けすることができる。以下の例文はこの種のhaal節を含むものである。

- (8) 'amsaa wa huwa 'uryaan-un. (er war nackt geworden)
 MV pf and he naked-NOM
 (Reckendorf 1967:562)

- (9) 'asbahuu wa hum mushrif-uuna. (am Morgen gewannen sie
 MV pf and they superintendent-NOM die Oberhand)
 (Reckendorf 1967:562)

- (10) fa baatat wa ka-'anna-haa ghariibat-un 'an-humaa.
 and MV pf and as-if-she alien-NOM from-them

(She has become apparently alien to them both.) (Peled 1989:259)

例文(8)の場合は、修辞動詞としての働きははっきりしているが、例文(9)の場合は、この文だけでは文意が曖昧になるものであって、状況次第で訳が異なったものになってしまう。(つまり'asbahaは「朝起きて」という意味に取れなくはない。)例文(10)は意味がはっきりしている。

次に記す3つの例文は、例文(8)(9)に現れた'amsaaと'asbahaが、完了動詞を含むwa-haal節を伴った例である。つまり(c-1)のグループの修辞動詞も(c-2)のようにして用いられることがあるということである。いずれにしても、この例からも修辞動詞とwa-haal節との結びつきが見えてくる。

- (11) wa yawm-an 'amsaa B wa-qad barakat la-hu fii had'at-i
 and day-ACC MV pf and-PTCL glitter to-him in quietness-GEN

al-layl-i tilka al-haqiyatu al-raa'ibatu.
 DET-night-GEN this DET-truth DET-dreadful

(One day B got to a point where that dreadful truth was glittering to him through the quiet night.) (Peled 1989:259)

(12)fa-ka-'anna al-'umama, wa-qad kaanat min qablu ka-al-tayr-i
 and-as-if DET-nations and MV pf previously like-DET-bird-GEN
-PTCL
 tabnii kull-u waahidat-in wakr-a-haa li-dhaati-haa, 'asbahat
 build every-NOM one-GEN nest-ACC-its for-self-its MV pf

wa-'idhaa fii wakr-i-haa bayd-un ghayr-u bayd-i-haa.
 and-then in nest-gen-its egg-NOM except-NOM egg-GEN-its

(As if the nations, who had been like birds who build their nests each for itself, woke up one morning only to find in their nests eggs which were not theirs.) (Peled 1989:259ff)

(13)wa 'asbaha yawm-an fa-'almaa nafs-a-hu zawj-a-haa.
 and MV pf day-ACC and-find self-ACC-his husband-ACC-her

(He woke up one day, only to find himself her husband.)
 (Peled 1989:260)

もちろんこれ以外の動詞も、このようにwa-haal節をとるものもある。例えばzallaである。

(14) wa zalla ba'da-haa layaaliya kathiirat-an wa haadhihi
 and MV pf after-it nights many and these

al-na^zzaaratu wa haad^haa al-^saliibu yulaahiq^aani-hi.

DET-glasses and this DET-cross follow-him

(Many nights afterwards these eyeglasses and this cross kept following him.) (Peled 1989:259)

いずれにしても、ここでは修辞動詞はwa-haal節との関わりがあって成り立っていることがわかった。haal節については、次の章で説明する。それから、こう言った様々な修辞動詞を含んだ様々な構文については5. 2で述べる。

4. 修辞動詞とhaal節について

第3章でアラビア語の修辞動詞は、主としてテンス・アスペクト・マーカ―として機能しているということを述べた。kaanaはテンス・マーカ―、その他は主としてアスペクト・マーカ―として機能していることを見た。しかし例文(1)の'asbahatはアスペクト・マーカ―ということは言えても、例文(2)の'aadaはアスペクト・マーカ―として機能しているとは言えなかった。アラビア語の修辞動詞にはテンス・アスペクトの意味を表すクラスとそれ以外の意味を表すクラスがあると考えられる。ここでは例文(2)の完全動詞(full verb)として現れた'aadaが、どのような場合に修辞動詞として意味解釈されるのかをみていく。

4. 1 修辞動詞'aadaとhaal節

例文(2)及び(c-2)の'aadaは、明らかに統語上は完全動詞として用いられており、本来の完全動詞としての統語上の働きは保持していると言える。それに対して、例文(1)の'asbahat [pf, 3sg. f] ('asbahatはその男性形で、以降この形を代表として用いる)は、本来の完全動詞としての機能(「朝になる、目覚める」)を統語上も意味上も失い、修

辞動詞として統語上も意味上も機能している。[ただし、'asbaha が完全動詞として用いられているのか、修辞動詞として用いられているのかが、単文だけでは判断しづらいことがある。このように機能が曖昧になるのは、waまたはfaという接続語が用いられている場合に限られる。例文(9)(12)(13)を参照。]

次に動詞が修辞動詞として用いられている場合に、完全動詞としての機能を保持しているかどうかを、'asbahaと'aadaで比較してみる。

		完全動詞としての特徴(+ 保持している / - 保持していない)			
		完全動詞として用いられた場合		修辞動詞として用いられた場合	
	統語形式	意味		統語形式	意味
'asbaha	+	+	→	-	-
'aada	+	+		<u>+</u>	-

完全動詞としての統語形式を'aasbaha は失い、'aada は保持しており、その違いは、第3章でも述べたように'aadaはwa節とっているが、'asbahaはwa節をとっていないという点である。この節は第3章でも述べたように、haal節と呼んでおり、この節には接続語waを取る場合(wa-haal 節)とwaを取らない場合(∅-haal節)がある。haal節は本来、文意に状況的・付加的意味を付け加えるもので、省略可能な(omissible) なのである。この2つの動詞のとりうる構文についてまとめると次のようになる。

- 1) 'asbaha ~ + 未完了形 (⇔ 'asbaha + wa (fa) 完了形)
 1) 'aada ~ + wa 完了形

'asbahaの場合も1)と同様にwaを用いた例 [例文(9)(12)(13)] があることから、本論では、1)の未完了形も、waのない節 [これも意味機能から見てhaal節=∅haal節/この節は後で述べることになるが、haal節ではなく、名詞文のcommentとして用いられていると私は考える。] と暫定的にみなして論を進めることにする。1)の未完了形の節は'aasbaha に依存する形で用いられているので、動詞は接続形としては無標な未完了形になっている。が、例文(12)(13)のようにwa(fa)を用いた節接続にすると、この後続する節は'aasbaha に依存せず、有標な完了形となって現れる。すると1)の'aada の構文と同

じ構文形式をとることになってしまう。しかし、'asbaha がwa(fa)節を取る場合は意味が曖昧になることが多く、'asbaha は現代文ではやはり未完了形を従属させるのが普通となっている。

それに対して、'aadaは1)で示したような構文形式をとる。'aadaを用いた例文をもう1つ記す。

(15)	fa-	'aada	wa-	rafa'at	'ayn-ay-haa	'ilaa	wajh-i-hi.
	and	MV	pf	and-	raise	eye-DUAL-her	to face-GEN-his
					pf		

(She raised her eyes to his face again.) (Peled1989:260)

この例からもわかるように、'aada を含むほとんど全ての例文は、wa-haal 節をとっている。'aada はそのような節が後続する場合に限って、意味上修辞動詞として機能することが許されるのである。もちろん本来の具体的な意味「戻る」で解釈されることがないわけではない。その場合、付带的意味（「～しながら」）を表す接続語waのない \emptyset -haal節(\emptyset -clause)を用いるのが普通である。こうなればもちろん修辞動詞ではなくなる。'aada が意味上修辞動詞の機能を担う要件は、1)のように wa-haal節を取ることであるとすることができる。

4. 2 具体化のhaalと補語的haal

'aadaが完全動詞として、及び修辞動詞として用いられているそれぞれの場合のhaal についてまとめると次のようになる。ただし、ここでは本動詞（完全動詞）に後続する未完了形動詞で始まる節も一種のhaal節として説明する。（wa-haal節をwa-clause, \emptyset -haal節を \emptyset -clauseで示す。）

- 註編 「～しながら戻る」 + \emptyset -clause (= \emptyset + 未完了形)[\Rightarrow omissible]
 (= 具体的意味) ↓ <補語化のhaal>
 修編 「再び～する」 + wa-clause (wa + 完了形)[\Rightarrow obligatory]
 (= 抽象的意味) <具体化のhaal>

先行動詞が抽象的な意味の時(修辭動詞)に用いられるwa-clause と、先行動詞が具体的な意味(「戻る」)の時に用いられる \emptyset -clause は、順に具体化のhaalと補語的haalとすることができる。つまり、前者は文章にとって必要不可欠な(obligatory)部分で、後者はそうではなく、省略することができる(omissible)部分ということになる。

このobligatory/omissibleに関して次の例文を比較してみる。

- (16) kaana al-walad-u yabkii (The boy was crying/used to cry.)
 MV DET-boy-NOM cry
 (17) xaraja al-walad-u yabkii (The boy went out crying.)
 go-out DET-boy-NOM cry

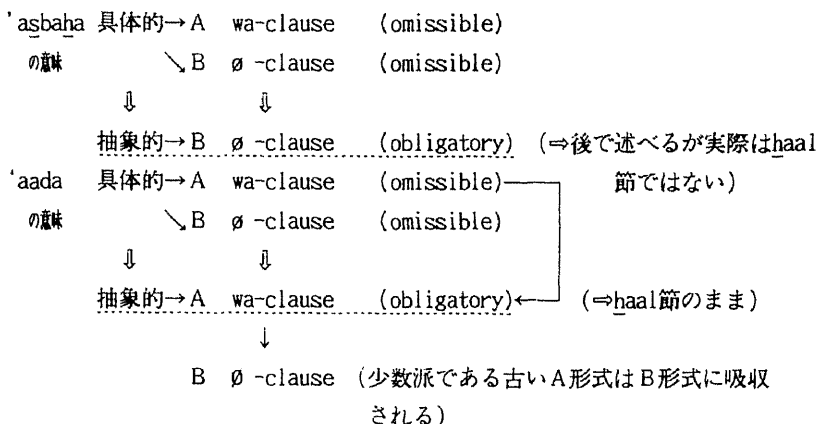
(16)のyabkii —— obligatory [\Rightarrow 必須 comment]

(17)のyabkii ---- omissible \Rightarrow haal

例文(16)の場合のyabkiiは義務的な要素であるゆえに具体化のhaalとなる。文意にとって必要不可欠な意味を担う部分になっているということになる。(17)のyabkiiはomissibleであるゆえに、あったほうが望ましいが必要不可欠なものではない補語的haalとみることができる。

4. 3 haal節の変化と修辭動詞

次に'asbaha の持つhaal節と'aada のもつhaal節を比較してみる。'asbaha の場合も、修辭動詞になれば、本来の完全動詞としての意味「朝になる、目覚める」を失って、抽象的な意味を持つようになる。以下に'aada の場合と比較してまとめる。



'asbaha の場合、抽象的な意味、つまり修辭動詞になれば∅-clauseを取るのに、'aada の場合は抽象的な意味（修辭動詞）となってもwa-clause(obligatory)をとるのはなぜか。Aが古いのかBが古いのかの議論は絶えないが、Stetkevych(1970:100)によればA→Bの変化ということになる。問題は'aadaの場合にどうしてA-formが残ったのかであるが、それは'aadaが基本的に持っている意味に問題があるのではないか、と思われる。他のアスペクトを表す修辭動詞が被った変化を'aadaだけが被っていないとすると、'aadaは先にも触れたようにアスペクトを表す修辭動詞のクラスには入らないのかもしれない。この点については後の章で触れる。

まとめると修辭動詞の形式的な成立条件はhaal節の接続であって、そのhaal節の意味が文意として義務的な(obligatory)ものになることである。つまりそれは先行動詞の意味の抽象化という意味機能の変化に伴う、後続するhaal節の義務化(obligatorization)であると考えることができる。

4. 4 haal節についてのまとめ

ここではアラビア語伝統文法学からのhaalの解釈に基づいて、修辭動詞とhaalとの関係、特に、4. 1～4. 3で触れなかったkaanaとhaalとの関係についてまとめる。

本論ではhaalとかhaal節という用語を何度か用いてきた。3. 4及び4. 1の説明の中では簡単に「文意に状況的・付加的意味を付け加える」ものという説明を加えた。そ

れが句であればhaal、節であればhaal節といった用い方をしてきた。

アラビア語伝統文法学では動作主(agent) 以外に動詞がとるものを「補語または補文」と呼んでいる。その動詞の補語は全て選択可能な(optional)要素で、peripheral or leftover (fadla) itemsとされている。その数は5つあり、その中に circumstantial complement(haal/haal節) も含まれている。こういった動詞の補語は、アラビア語で maf' uul fii-hi (行為のなされる状況) または zarf (状況) と呼ばれ、主として、時・場所を表すものとされている。例をあげると次のようになる。

ra' aytu-hu al-yawm-a.
see-him DET-day-ACC (I saw him today.)
ra' aytu-hu xalf-a zayd-in.
see-him after-ACC zayd-GEN (I saw him after Zayd.)
ra' aytu-hu fii-al-bayt-i.
see-him in-DET-house-GEN (I saw him in the house.)

Siibawaihi(I:237)は、名詞の修飾について言及している箇所、どのような種類の名詞修飾の場合であっても、sifaという用語(またはsifaの派生形態の用語)で説明している。しかし、Siibawaihiが用いているsifaというのは漠然としていて、修飾関係を指している場合もあれば、その修飾関係を成立させている修飾語・句・節を表している場合もある。いずれにしても、そのsifaの説明の中にhaalの例が含まれている。

haadhaa zayd-un dhaahib-an.
this Zayd-NOM going-ACC (This is Zayd going) (I 237,3ff)

Siibawaihiは、このhaalについて、「同一のものであって、一部ではないもの」[yakuunu huwa huwa wa laysa min ism-i-hi] という説明(I 237,3)をつけている。これがhaalの特徴となる説明と考えられる。つまりSiibawaihiがここで言いたかったのは「修飾語と被修飾語がともに、Topic として機能している語と一種の同一指示(coreference) 関係になっているが、修飾語と被修飾語は、お互いに全体一部分の意味関係にはなっていないもの」と私は解釈する。これが同格(apposition)とhaal (節)を

区別する鍵になると私は考える。ここでの「同一指示」というのは一つのtopic に対し
てcomment となっているということである。

次の2つのsifaを比較して、このことを考えてみることにする。

sifa

(18)	haadh ^h aa	zayd-un	al-tawii <u>l</u> -u	[同一指示] + [一部]	⇒同格
	this	Zayd-NOM	DET-long-NOM	(I 237, 3)	
(19)	haadh ^h aa	zayd-un	dhaahib-an	[同一指示] + [一部でない]	⇒haal
	this	Zayd-NOM	going-ACC	(I 237, 3ff)	

(This is Zayd going.)

アラビア語文法では、形容詞は名詞類(nominal class)の中に含まれる。つまり名詞類の中に、種として名詞と形容詞があるということになる。この名詞類どうしの並列は同格関係となり、同格もsifa(修飾)の一種とされている(これに関してはTalmon1981を参照)。例文(18)のzayd-unとal-tawiil-uは「全体—一部」の意味関係になっており、topicであるhaadh^haaと一種の同一指示になっている。しかも限定名詞と限定形容詞が並んだもので、限定性と格が一致しており、これはアラビア語文法では同格(apposition)とされる。それに対して例文(19)のzayd-unとdhaahib-anは限定名詞と非限定名詞が並んだもので、限定性が一致せず、格も主格と対格で格の一致が見られない。[分詞(dhaahib)も形容詞と同じ扱いになり、名詞類に含まれる。] zaydunとdhaahibanはhaadh^haaと同一指示関係になっているが、zaydunに対してdhaahibanは「全体—一部」の意味関係になっていない。つまり例文(18)との違いは限定性と格が一致せず、「全体—一部」の関係になっていないということである。それゆえ例文(18)の場合は同格であるのに対して、例文(19)の場合は同格関係にはならず、haalとみなすことになる。同格とhaalはともにsifa(修飾)とされるが、この2つは限定性・格・同一指示・意味関係(全体—一部)から区別されることになる。

次に、アラビア語伝統文法学でよく問題になるkaanaとhaalとの関係について、述べ

ておく。次の4つの形を比較してみると、kaana とhaalとの関係はどう考えるべきかがわかる。

			同格示	一部
(20)——	zayd-un al-tawiil-u	限定+限定 ⇒句		+
	Zayd-NOM DET-long-NOM	(Zayd, the taal one)		
(21)∅	zayd-un tawiil-un.	限定+非限定⇒文(T + C)		+
	-NOM long-NOM	(Zayd is tall.)		
(22)kaana	zayd-un tawiil-an.	MV + T + C ⇒文		+
	MV -NOM long-ACC	(このMVは訳に翻すnawaasix)(Zayd was tall.)		
(23)haadh _{aa}	zayd-un dhaahib-an.	T + C + haal ⇒文	+	-
	this Zayd-NOM going-ACC	(This is Zayd going.)		

T = Topic C = Comment

例文(22)でzayd-unとtawiil-anの意味関係が「全体—一部」の関係になっているが、格と限定性は合っていないので同格にはならない。つまり例(20)のように、sifaになって句を形成しているのではない。よって例(20)にkaanaがついた存在文

(20') kaana zayd-un al-tawiil-u.
was Zayd-NOM DET-tall-NOM (Zayd, the tall one, was.)

とは区別される。例文(22)は例文(21)と同様の「限定語+非限定語」の語順(名詞文の基本形)から、tawiil-anはzayd-unのcommentとなる。zayd-unとtawiil-anは「全体—一部」の意味関係から、tawiil-anはhaalとはならず、例文(23)のdhaahib-anがhaalと解釈される場合とは区別される。よって例文(22)のkaanaは、補語としてhaalをとったのではないということになる。つまり修辞動詞kaanaの構文は存在を表す文にhaalが付いたものではなく、例文(21)のような名詞文にテンス・マーカーとして、kaanaがついたものである(cf. 詳細はBravmann1953参照)。

kaanaのcommentの位置に未完了形が来る場合も同様に、その未完了形をhaalとは考えない。commentに現れる未完了形は例文(23)のような分詞形を介在して現れるようにな

ったと私は考えている。次の二つの例文で考えてみる。

(24) kaana zayd-un dhaahib-an. (Zayd was going.)

MV Zayd-NOM going-ACC

(25) kaana zayd-un yadhhabu. (Zayd was going.)

MV Zayd-NOM go(impf)

例文(24)よりも例文(25)の方が構文として生産的になっている。例文(25)のyadhhabuががhaalではないのは、例文(24)のdhaahib-anがhaalではないのと同じである。よってkaanaは修辭動詞として用いられている場合、存在文kaana zayd-un. (Zayd was.)があつたのであって、その存在のkaanaにhaalが付いて、例文(24)(25)のように発展したものではない。

5. 修辭動詞を含む文の構成

第4章では、主に修辭動詞の統語機能・意味機能について述べてきた。この章では文の構成という点から修辭動詞について考える。5. 1では修辭動詞が現れる位置について述べ、5. 2では修辭動詞を含む構文について考える。

5. 1 修辭動詞の位置

アラビア語伝統文法学を振り返ってみると、修辭動詞が現れる位置に名前がつけられている。それをアラビア語ではnawaasixと言う。(この用語はあえて英語に訳せばabolishersとなる。)

伝統文法では

Zayd-un kabiir-un.

Zaid-NOM big-NOM (Zaid is big.)

といったような基本的名詞文の前に現れて、元の支配関係を変えてしまう動詞的または

小詞的支配詞(either verbal or particle governors) を、nawaasix al-ibtidaa' と呼んでいる。伝統文法ではこのような位置概念を認めてきたわけである。kaanaを含めた修辭動詞が、このnawaasixとして用いられていることと、この統語位置の機能と修辭動詞の機能との関係について、ここでは述べる。

Bohas(1990:65,5-9)が、nawaasixについてまとめているところを下に引用する。

These elements, which were at a rather late period gathered within the general category of nawaasix l-ibtidaa' (abrogators of ibtidaa'), comprise the aspectual auxiliary verbs of the kaana class, the modal particles of the 'inna class, and the 'epistemic' verbs of the zanna class.

nawaasixという位置に続く文は、今述べたように名詞文であって、ゆえに基本的に動詞を含まない文(non-verbal sentence)であった。しかし、しだいに(前の章でも説明したが)名詞類が分詞形を介在して未完了形にとってかわるようになり、ここまでの修辭動詞を含む例文から分かるように、現代文では動詞を含む文もnawaasixに後続する文として用いられるようになったのである。

それではまず名詞文のnawaasixの位置に具体的に単語が用いられている3つの例文を次に見てみる。

a)	kaana	zayd-un	kabiir-an.	(Zayd was big.)
	MY	Zayd-NOM	big-ACC	
b)	zanantu	zayd-an	kabiir-an.	(I thought zayd was big.)
	think	-NOM	-ACC	
c)	'inna	zayd-an	kabiir-un.	(Indeed Zayd is big.)
	PTCL	-ACC	-NOM	

a)ではkaanaが名詞zayd(Zayd)を主格で、kabiir(big)を対格で支配する。主格-対格は

普通はagent-objectの関係に現れるものだが、ここではtopic-commentの関係に現れている。b)では補文として名詞文をとっており[このことはzanantuの後に補文化詞'annaをとれることからわかる]、topicもcommentも対格に置いている。c)では'innaが名詞zaydを対格で、kabiirを主格で支配している。この場合も一種の補文として名詞文をとっていると考えることができる。[補文化については別の機会にまとめることにする。]

この中で特に重視したいのはkaanaである。このkaanaは、アラビア語伝統文学では二つに分類されている。意味を成すのにattributeをどうしても必要とするkaanaを、kaana al-naaqisatu(the incomplete or relative kaana)、一方attributeをさらに必要としないkaanaをkaana al-taamatu (the complete, absolute kaana)と呼んでいる。修辭動詞としてのkaanaは、前者のkaana al-naaqisatuになり、言わば不完全な動詞とされているわけである。kaanaは修辭動詞としては単にtemporal operatorとして用いられており(第3章参照)、修辭動詞としての意味機能を持っている。修辭動詞としては、語彙の持つ意味の抽象度が高まることが重要な条件とすることができた(第4章参照)。抽象的という点では、kaanaも'innaも一つに括れてしまう。しかし'innaは小詞(particle)で、動詞としての活用を持っているkaanaの場合とは異なる。このkaanaは'innaとは違って修辭動詞として用いられているのである。ここではa)の構文、すなわち修辭動詞がnawaasixに現れた文に関して述べていく。

kaanaが修辭動詞として機能している文は、名詞文に対して修辭動詞が付いたものである。それに対して、kaana以外の修辭動詞を含む文構造は、第4章で述べたように、「動詞+haal」から始まる。そこでは一定の動詞に限って、時代とともに動詞の持つ具体的意味が失われ、抽象化されて修辭動詞となった。その抽象化はa)の文、すなわちkaanaが名詞文に対して修辭動詞として機能する文にならう類推変化と考えることができる。ここまでの例が示すように、修辭動詞化するということは、意味機能としては、テンス・アスペクト機能などの文中で抽象化された意味役割を担うようになることだと言える。修辭動詞が機能する文が一般化する過程で、このように類推変化のモデルになり、抽象化された意味役割を文頭の動詞が担うようになる変化のモデルになったのは、kaanaを代表とするnawaasixという文頭の位置概念であると言える。

アラビア語の場合この変化は名詞文から始まって動詞を含む文(後で述べるようにcommentに動詞を含む節をとる名詞文)に至っており、「助動詞」化と云うにはいさ

かまとどいを感じさせる。いずれにしても、kaana以外の修辞動詞を認めるためには、やはりnawaasixという統語位置の役割 (kaana の持っていたモデル的位置役割) を認める必要がある。その位置が現代文では、名詞文 (commentに動詞を含んでいる、いないにかかわらず) の文頭に認められ、それがテンス・アスペクトなどといった、文中のいずれかの部分に対する修飾機能を担うようになってきている。もともとkaana がnawaasixに現れており、さらに現代文では抽象化された様々な修辞動詞が一つのカテゴリーとしてnawaasixの「位置」に現れ、nawaasixという位置はテンス・アスペクトなどの抽象的な意味機能を持つようになったのである。これはテンス・アスペクトなどの抽象的な意味機能を語彙化していく傾向、つまりnawaasixの位置に現れた語彙にテンス・アスペクトなどの抽象的な意味機能を持たせることになる重要な構文上の傾向と考えることができ、一種の機能的・分析的な言語変化とみることができる。このことはひょっとしたら、一般に言語変化の一つの傾向と言えるのかもしれない(cf. Heine 1992)。

kaanaの現れるnawaasixという位置の持つ機能、これはアラビア語伝統文法学の中で認められてきたものだが、抽象化された理論上の位置ではなくて、具体的に文が抽象部と具象部に分かれ、その抽象部の位置は、文に対してテンス・アスペクトといった抽象的な意味を加える位置として非常に機能的なものである。その位置に一つの機能を与えたのは、kaanaを代表とするnawaasixを具現化するグループ (カテゴリーといってもよいだろう) である。その位置が持っている機能は、kaana の構文にならう類推変化の中で他の動詞にも与えられて、その結果、修辞動詞を増やす傾向となって現れている。よってMV+T+Cといった、kaana の基本構文のCの位置に先にも述べたように分詞を介する形で、名詞類だけではなく動詞類も現れるようになり、そこでkaana が動詞を含む文を従えるようになった。それはT+Cという語順が固定していることからわかる。一方kaana以外の動詞の場合は、次の構文のところで述べるように、wa-haal節のwaが落ちて、この部分がTにとって文としての必要情報 (Tに対するcomment) になるのに並行して、V が抽象化していった。この抽象化は kaana 構文にならう類推、すなわちkaana構文の持つnawaasixの機能が多様化する傾向と合わさって、Vが修辞動詞化したと考えられる。

まとめると、ここではkaanaだけではなく、'axawaatu kaanaもnawaasixに現れる語彙グループと見ることができる。つまり、nawaasixに現れる1つの語彙グループとして修辞動詞を含めることができる。

5. 2 nawaasixを含む構文

ここではnawaasixを含む文を構文という観点からまとめる。5. 1で述べたように、nawaasixという位置を考慮すれば、kaana を持つ文も、zanantu(think)や' inna(PTCL)を持つ文と同じ文構造だということになる。それは、そういった語がnawaasixに現れる語彙グループの一つだからである。しかし、nawaasixと後続語との統語関係を考えると、以下で示すようにkaana は他の2つ(zanantu, ' inna)とは違った現れ方をすることがわかる。nawaasixという位置概念を導入して、nawaasixを持つ文構造が基本的には同じだとすることで、kaanaの文構造は見えてくる。nawaasixという位置概念を認めると、kaanaのない、現在の時を持った名詞文zaydun kabiirun. (Zayd is big.)は、kaanaを含む過去の時を持つ名詞文kaana zaydun kabiiran. (Zayd was big.)と同じ種類の文構造となる。つまり、前者は zaydunの前のnawaasixの位置が空いているからである。よって先にも述べたように、kabiiranは存在のkaana に付いたhaal節ではないということになる。もしkabiiranがhaalだとすれば、存在のkaana に付いたhaal節は省略可能なもの(omissible)であるはずであると言えるからである。以下修辭動詞を含む文の統語関係について見る。

まず次の文でnawaasixを含む文の同一指示(coreference)を検討してみる。

(26) kaana zaydun kabiiran. kabiiran はzaydunを指す。kaana はzaydunを
 MV Zayd big そのtopicとしている。
 ┌──────────┐ ┌──────────┐

(27) zanantu zaydan kabiiran. kabiiran はzaydunを指す。 zanantuは省略さ
 think ┌──────────┐ れた' anaaをそのtopicとしている。

例文(27)の独立人称代名詞' anaa(I)は表示されていないが、この' anaa と動詞の活用語尾の-tu が同一指示関係にあるとすることができる。

' anaa zanan -tu
 I think -I
 ┌──────────┐

さらにこのことを語順という点から検討してみる。(∅は独立人称代名詞、ここでは'anaaが本来現れているところ)

(28)	kaana MV	zaydun kabiiran. Zayd ↓ big	∅	zanantu think	zaydan kabiiran. Zayd ↓ big	
(29)	zaydun Zayd	kaana MV	kabiiran. ↓ big	∅ *zaydun Zayd	zanantu think	kabiiran. ↓ big
(30)	kaana MV	zaydun dhahaba. Zayd go	∅	zanantu think	zaydan dhahaba. Zayd go	

このことから分かることはzanantuはkaanaと違って、文中で第1位の位置になれば、nawaasixとしての機能が果たせないことになる。これは同一指示の関係から見ても確認できる。例文(29)はzaydunをtopicとして文頭に出すことができる。その場合次に現れる動詞と同一指示が条件となる。つまりkaanaの活用語尾は∅になるが、これが3人称単数を示しており、その∅とzaydunが同一指示となる。これに対してzanantuの場合は活用語尾の-tuとzaydunは同一指示にはならないので、繰り上げられたzaydunを持つzanantuの文が非文ということになる。

第3の位置に現れる語、ここではkabiiran(大きい)とdhahaba(行く)がnawaasixに現れた語と同一指示ならば、第1と第2の語順は入れ替えることが可能だが、もしそうでなければ入れ替えることは不可能である。指示関係の異なる語(zanantu)を越えて、同一指示の関係(zaydunとkabiiran)は成立しない。言い換えると、アラビア語では第1位の語(nawaasixの位置に現れた語)と第2の語は同一指示でなければならないということになる。またzanantuの次に補文化詞'annaを入れることができることから、zanantuはzaydun kabiiranを補文として見ることができる。そう考えると上で述べた同一指示成立の関係は納得がいく。'innaの場合も同様に補文をとっていると考えればよい。kaanaの場合、格関係と同一指示関係を見ていると、一見kaanaが存在の

意味であって、それにhaal (対格をとることが多い) が付いたような感じを与えるが、先にも述べたように、それならばそのhaalは省略可能なものであるはずで、しかもそれが義務的なもの(obligatory)になる理由が見いだせない。kabiiranはkaana による支配上の対格であって、haalではない。それはkaana がある時だけ対格で現れて、kaana がなければ主格で現れることからわかる。kaana の場合は名詞文(Topic + Comment)にkaanaが付いて kaana+名詞文 となったのであるが、kaana 以外の他の修辭動詞の場合は、haal節を条件として成立したものでkaana の文とは成り立ちが違っているということとを'aada が修辭動詞として機能する例文をヒントに知ることができたのである。

次にkaana 以外の修辭動詞がnawaasixに現れる場合を考えてみる。

'asbaha A + ~ wa A + V ~ A = agent V = verb
'asbaha の例で考えると、もともと2つの文が等位接続された重文があつて、それが'asbaha の抽象化に伴い、wa-haal節は文意として具体的な意味を持つ、義務的な要素になった。その後接続語であるwaが落ちて、'asbaha+A+Vとなったのである(下のまとめに詳述)。つまり先行動詞の意味の抽象化にともなつて、修辭動詞という一つの動詞グループができるようになったわけである。

SiibawaihiはAl-kitaab の第1章でアラビア語の語類(word class)は動詞、名詞、小詞だとしており、この中の動詞(fi'l)は動詞類(verbal class)と言ったほうが正しく、大きな語類である。その大きな語類としての動詞類(fi'l)は動詞と修辭動詞という2つの種を持つとすることができる。[これについては次の第5章で再び触れることになる。]種としての修辭動詞は極めて流動的な語彙グループで、種としての動詞という語彙グループと境をせめぎあっている。傾向として修辭動詞としてのグループに含まれる語彙の数は増えており、動詞という種から修辭動詞という種へという変化の過渡段階にある語彙もあり、また動詞という種のままのものもある。

nawaasixを含む構文についてまとめると、以下のようになる。

<a> nawaasix + [1] + [2]

この構文には文頭に必ずnawaasixの位置があつて、ここが空き(∅)になることもあるが、先にも述べたようにkaana などが入る。[1] の位置には名詞類で名詞文構成要素の

5. 3 補助動詞化

ここでは一見複合動詞を形成しているかのように見える動詞の連鎖は、実は複合動詞ではないということを述べる。(3. 2参照)

前の5. 1及び5. 2で述べたように、nawaasixという位置を文頭に持つ構文は、一見複合動詞を形成するかのように見えるかもしれない。5. 2で示した<d>の構文は

verb + agent ~ verb + ~ (5.2-<d>)
pf impf

アラビア語現代文における典型的な修辞動詞をとる構文と言える。先行する動詞(pf)をV1とし、後続する動詞(impf)をV2として簡略化して考える。

V1 + agent + V2 ~

この構文でV1(pf)は修辞動詞として機能し、V2(impf)は省略可能なhaalではなくて、義務的な要素となっている。この構文は3. 2で示した多くの例文からわかるように、文脈から明らかな場合、agentは現れないのが普通である。この行為者は、先にも述べたようにtopic(T)と考えた方がよく、よってV2もcomment(C)と考えるべきである。

V1 + T + V2 (C)

topicとして解釈されるagentは、もちろんcommentであるV2に対してのものである。同一のtopicを持つ文が文脈上続けば、このagentは繰り返し出てくることはない。実際同じtopicを持つ文が続くことがしばしばあり、topicは現れないほうが多いということが出来る。よってこの構文の出現頻度数から言って、よく見かける形式は次のようになる。

V1 + V2 ~ ⇔ V1 + [∅ + V2 ~]

この動詞の連鎖は一見複合動詞が形成されているかのように思わせるかもしれない。し

かし、V1とV2の間は、Tであるagentが本来存在するというのを忘れてはならない。このことは5. 2の例文(29)で示したように、TをV1の前に繰り上げた場合の、動詞の持つ活用語尾の同一指示関係からも裏付けられることである。

V1はnawaasixに現れることが可能な語彙となっており、後続する具体的な意味を持つ名詞文に抽象的な意味を添えている。そのV1は繰り上げられたT、もしくは省略されたTと同一指示関係にあり、そのTに対するC(comment)としてV2があるという構造になっている。これはあくまでもkaana 構文にまねて、すなわちkaana+名詞文の構造を基礎に出来た構文である。V1もV2も、もともとは異なったそれぞれの文の完全動詞であったゆえに、それぞれの含まれる文構造のレベルが異なるものであると考える。

[V2はもともと別の文の完全動詞で、変化後は名詞文のcomment として機能する節。] nawaasixであるV1は、まるで補文を取るかのように名詞文を取っており、その名詞文の中にV2は含まれることになる。よってV1とV2の間には統語上の不連続があり、よって複合動詞を形成しているわけではないということになる。

意味機能という点から見れば、V1はV2に対して補助動詞的な機能を担っているといえる。V1は統語上はV2とはレベルの違う文構造をしているが、意味上は補助動詞として機能していると考えられる。その点では、特別扱いをしてきた'aadaの場合も、統語上ではなく意味上で補助動詞的に働いており、このケースと同じだと見ることができる。「見ることができる」と述べたが、これは単なる「見方」として述べたのではなく、実質的な話として、文構造の基盤が修辞動詞の構文では共通しているということを示したのである。

'aada に関しては先に何度も触れてきたが、V2を取る場合、接続語waを介入しなければならず、このことは明らかに複合動詞という見方を阻止してしまう。'aada のように、waを介入してV2を持ってくる構文を取る動詞は、'aada 以外にもあり、例文(3)であげた'ajaaba もそうである。'ajaaba は本来「答える」という意味だが、ここは抽象化して「言う」という具体的な行為の意味を除いた抽象的な意味特徴 (semantic feature)だけを構文に当てはめて、文頭的位置(nawaasix)で表現しているのである。

このようにwaをとる'aada の場合も、先のV1+V2の場合も、先行する動詞が抽象的な意味を担うという位置を持っているといえる。抽象性の高い動詞が先行して、後続する文が具体性のある内容を持つという構造を、アラビア語では構文化しているわけである。

まとめると、普通はV 1が抽象化を起こして、and が落ち、V 2が形態変化により未完了形となる。しかしV 1が抽象度の高い意味特性を持ったクラスの動詞である場合は、そのような変化は起こせない。たとえand が落ちるといふ変化が起こったとしても、変化の段階(stage) が異なる。その場合は、先に述べたV 1 + V 2の構文をモデルにした類推変化にすぎないとする。例文(4)の'aadaはこの例である。

まとめると修辭動詞のとり構文は次の2つになる。

(7) V 1 (+T) + V 2

(i) V 1 wa V 2

(7) のV 1には、主としてテンス・アスペクトを表す動詞が入り、(i)のV 1には'aadaなどのテンス・アスペクトを表すのではない動詞、すなわち先にも述べたように、具体的な行為の意味を除いた抽象的な意味特徴を持つ動詞が入ることになる。

英語に当てはめて言えば、go and see ~, come and go~, return and see ~, answer and say ~ と言ったように、アラビア語では特定の抽象的な意味特性(semantic feature)を持ったクラスの動詞がV 1にある場合はand が落ちて、2つ目の動詞が形態変化を起こして依存関係を作りやすく、(i)の構文をとることになる。

Stetkevych(1970:99)は'aadaを 'axawaatu kaana に含めて考へている。'axawaatu kaana は主としてアスペクトを表し、(7)の構文をとる。一方、'aada はアスペクトを表すものではないので、(7)の構文はとらず(i)の構文をとる。よって'axawaatu kaana の中には'aadaは含まれない。また'aada はnawaasixの位置にも現れず、4. 2の <a>のnawaasixの構文を取れないということになる。つまり'aadaはアスペクトを表すクラスではないので、から<d>のような変化を被らなかつたわけである。

このクラスの動詞に属すると思われる動詞は、他にもあると思われるが、これは動詞類の中に一つのクラス(sub-class)を形成するものと考えられる。この分類およびこのグループの特徴となる意味については別の機会にまとめることにする。

6. 動詞類という語類

アラビア語における語類(word class)は、5. 2でも述べたように動詞、名詞、小詞の三つに分けることができる。このような語類の分類について、Owens(1989-210:1~4)

では次のように述べている。

Among the most famous tenets of Arabic grammar is the division of words into verbs, nouns and particles. What is perhaps given less attention is the fact that the Arabic grammarians defined each of these according to criteria from all levels of linguistic analysis—phonological, morphological, syntactic and semantic/pragmatic.

この説明の中でも述べられている通り、アラビア語伝統文法学の中では、この3つの語類は主として形態的・統語的分析に基づいて定義されてきた。ここでは本論で問題としている修辞動詞に関わる動詞類(アラビア語でfi'1)と、それと平行する例として名詞類(アラビア語で'ism)について、Siibawaihi(I 195-197)に基づいて述べる。まず名詞類については、sifa(修飾)という文法関係に基づいて考えてみる。なおアラビア語におけるsifa(修飾関係)については、名詞類どうしの同格関係が基本となる。[詳細はTalmon(1981)を参照。]まず次の例文(31)(32)を検討する。

(31)	marartu bi-	rajul-in	'asad-in	'ab-uu-hu.	(I 197.21)
	pass	by-	man-GEN	lion-GEN	father-NOM-his
	pf			⇒strong	☞同格→ <u>sifa</u> の成立

(I passed a man whose father was a lion.)

(32)	marartu bi-	rajul-in	'asad-un	'ab-uu-hu.
			-NOM	☞同格でない→ <u>sifa</u> ではない

例文(31)と例文(32)で名詞類(nominal class)が並列されたところ(枠で囲われたところ)を比較すれば、sifa(修飾)という文法関係を通して、アラビア語における名詞類という語類のありようが見えてくる。例文(32)のrajul-in(隣)'asad-un(隣)はともに

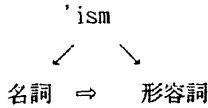
非限定(indefinite)であるという点では共通しているが、数(number)が一致していないという理由で、例文(32)は同格(apposition)とはならず、よってsifa(修飾)という関係は成立しない。ところが例文(31)の場合rajul-in(驢)と'asad-in(驢)はともに非限定(indefinite)であるという点では例文(32)の場合と変わらないが、格標示(case marking)という点では、例文(32)の場合とは違って格の一致がみられる。よって例文(31)では同格関係が成立し、sifa(修飾)の関係が成立することになる。そうすると例文(31)の場合は例文(32)とは違って、'asad(ライオン)という語が潜在的に持っている、質の意味(implicit meaning of quality)が現れて、抽象的な意味(ここでは「強い」)を持つようになる。これは同格という統語関係(paratactic relation)が成立することに伴う語彙の意味の抽象化であると言える。もちろん次の例文(33)(34)でSiibawaihi(I 195.7)も指摘するように、名詞類に属する全ての語がこのような現象を取るわけではない。

- (33) * marartu bi sahiifat-in tiin-in xaatam-u-haa. (I 195.7,
 pass by tablet-GEN clay-GEN seal-NOM-its 167,20,
 235.5)
- (34) marartu bi sahiifat-in tiin-un xaatam-u-haa. (I 195.10)
 -NOM

(I passed a tablet whose seal was of clay.)

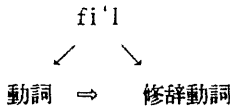
例文(33)は非文で、正しくは例文(34)のようにしなければならない。つまりこの例では同格関係(appositive relation)を成立させてはならないことになる。それは並列された二つ目の語が、潜在的に質を表す特徴を持っているかどうかで決まるわけである。例文(33)(34)に現れるtiin(clay)は、アラビア語ではこのような特徴を持たないということができる。アラビア語の名詞類に属する語は、今述べたように、潜在的に質を表す、相対的に抽象的な意味を言語の意味として出せるかどうかで、統語的ふるまい(syntactic behavior)が変わってしまうわけである。つまり、基本的には名詞類に属する語は、名詞として機能しているが、それが一定の統語的条件が整えば、形容詞として

意味上機能することになる。このことを図式化すると次のようになる。



'ism (名詞類) という語類にはもともと名詞であるものと、もともと形容詞であるものがある、その名詞の中には特定の統語関係を持つと相対的に抽象化され、形容詞として用いられる名詞もあるということになる。つまり'ism (名詞類) という語類は、名詞と形容詞という種を持っていて、名詞は条件付きで形容詞としても機能することができる。これらはすべて、上図のように一つの'ismという語類として括られることになる。

これと同様に、本論で問題となっている修辞動詞も、下図のようにfi'l (動詞類) という語類の中に含まれる一つの種である。



fi'l (動詞類) という語類の中には、もともと動詞であるものと、もともと修辞動詞であるものが含まれるが、一定の統語関係 (haal節の接続、またはnawaasixの位置に現れること) が成立することによって、語の意味が相対的に抽象化されて修辞動詞として用いられる動詞も存在するのである。つまりfi'lという語類の中には、動詞と修辞動詞という2つの種が存在し、特定の統語条件が成立すると、動詞が修辞動詞として機能するということになる。

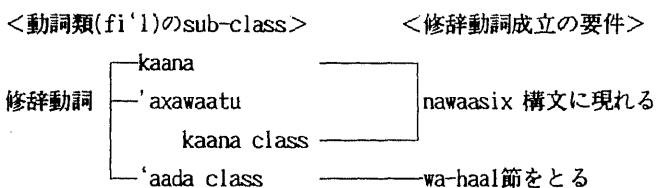
本論で何度もとりあげた'aadaという動詞は、wa-haal節を伴い、完全動詞として用いられながらも、修辞動詞として機能するという、統語上特別な形式を取ったのは、'aadaと言ったような一定の意味特徴 (semantic feature) を持った動詞はnawaasixの位置には基本的に現れないものだからである。nawaasixについてはすでに述べた通り、その位置に現れるのは、テンス・アスペクトを表すkaanaと'axawaatu kaanaに限られてきた。つまりアラビア語には修辞動詞として機能しうる'aadaのような動詞のクラス

が存在し、これは 'axawaatu kaanaには含まれないことになる。

まとめると修辭動詞成立の条件として、修辭動詞のうちkaanaと'axawaatu kaanaに属するものは、nawaasixを含む構文に現れることを条件とし、修辭動詞の中で、それ以外のもはwa-haal節の接続を条件としているということが出来る。このことから、アラビア語の修辭動詞として機能しうる動詞の中には、'axawaatu kaanaに含まれるグループの動詞と、それに含まれないグループの動詞があって、それぞれが動詞類のなかでクラス(sub-class)を形成していると考えることが出来る。

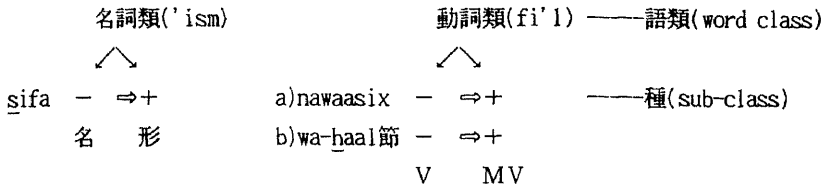
7. まとめ

本論ではアラビア語の動詞類という語類の中に、修辭動詞として機能する動詞が種、すなわちクラス(sub-class)として存在するというのを見てきた。その修辭動詞はその統語的・意味的機能から、次の3つに分類することができる。



伝統的な分類では、kaanaと'axawaatu kaanaの2つを修辭動詞としてきたが、本論では 'aada などの動詞を取り入れて、修辭動詞として機能する動詞を3種類のクラス(three sub-classes of fi'l)に分けた。kaanaと'axawaatu kaanaは、テンス・アスペクトという意味の面からも、またhaal節を従えるかどうかという統語面から見ても、区別されるべきものであった。この2つは位置を表すnawaasixという位置を具現する語彙グループに含まれる。haal節の具体化と連動する修辭動詞化によって、現代アラビア語では、nawaasixに現れる語彙が増える傾向となっている。つまり'axawaatu kaana に属する語彙が増えているということになる。名詞がsifaという統語機能を担う場合、形容詞として機能する例から名詞類('ism)という大きな語類のありようを見ることができた。同様

に動詞が修辭動詞として機能する例から、動詞類(fi'l)という大きな語類を見ることができた。



このように種のレベルで語が転用されることになる。動詞類のうちa)はkaana wa 'axawaatu-haa, b)は'aada class となり、成立要件を見てみると、修辭動詞は大きく2つに分かれるが、実際はkaanaと'axawaatu kaanaは、統語上も意味上も機能が異なるために、この章の初めに述べたように、結果として修辭動詞は3つに分かれることになる。

kaanaと'axawaatu kaanaの分類については、kaanaはテンスとしての意味機能を持ち、'axawaatu kaanaはアスペクトとしての意味機能を基本としているという点で、意味上区別され、kaana構文はhaalをもともと持っておらず、'axawaatu kaana構文はhaalをもともと持っていたという点で、この2つは統語上区別されるわけである。この統語上の違いは、あえてwa節を取れるかどうかをみればはっきりとした。kaanaの場合はwa節は絶対に取りませんが、'axawaatu kaanaの場合は取ることができる。

さらにnawaasixという位置を持つ構文の重要性についても述べた。kaanaはnawaasixという位置を具現する語として機能しているということも述べた。このkaanaのnawaasix構文を真似て、'axawaatu kaanaもnawaasix構文を取るようになったのである。つまりこの2つは、nawaasixという位置機能という点で合流したものである。このことからnawaasixという構文上の概念の重要性が分かった。

修辭動詞は、意味上でのみ、補助動詞として機能しているということも述べた。補助動詞と意味上解釈される動詞と本動詞の接続については2つの方法がある。接続に接続語wa(時にfa)を用いる場合と用いない場合がある。

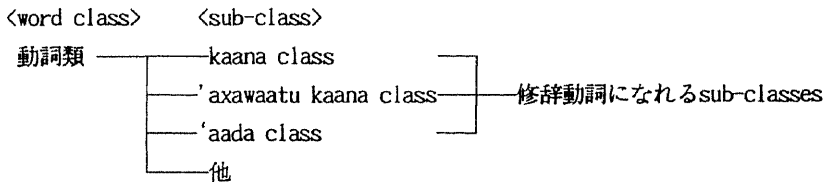
- (a) V1 ∅ V2 —— kaana と 'axawaatu kaana
- (b) V1 wa V2 —— 'aada class と 'axawaatu kaana

両方の接続方法をとる'axawaatu kaanaについては、(逆に類推(analogy)変化したものもあったと思われるが)、(b)の形の方が古い形であると考えることができた。いずれにしても、現代文ではほとんどが(a)のパターンである。(b)のような並列構文(paratactic construction)が基本となっていて、V1に現れた動詞が抽象化して修辭動詞になったと考えられる。この並列構文(parataxis)と、語の意味の抽象化は、名詞類の場合にも並行して当てはまるもので、これについては別の機会にまとめることにする。

しかし(a)のようにV1 V2と並列したからといって、複合動詞が形成されたのではないということも述べた。V1とV2は、基本的に構造レベルの異なる要素であって、本来V2をcommentとするtopicを、V2の前に省略しているからである。統語上は複合動詞を形成しているとは思えないが、意味上は補助動詞としての意味機能は持っていると言うことはできる。修辭動詞と認めてきた動詞のうち、意味上での変化としてkaanaはもともと補助動詞的であり、'axawaatu kaanaは補助動詞的になったもので、'aada classは完全に補助動詞的になり切らなかったとまとめることができる。'aadaは後続動詞が接続語waによる重文構造を取り、動詞の形態からも依存形態になっていないからである。つまり本来補助動詞的でなかったものが、補助動詞的になってきたという傾向があるということができる。

いずれにしても、アラビア語では[抽象部] + [具象部]という分離した述語動詞部を形成しているが、これをアラビア語では構文化しているということを述べることができる。

本論で問題になっている修辭動詞が含まれる動詞類は、修辭動詞の分析から、次の様にまとめることができる。



動詞類はいくつかのsub-classに分けることができた。その中のkaana, 'axawaatu kaana, 'aadaの3つのクラスは、完全動詞という顔の他に修辭動詞というもう1つの顔を持つ

たsub-classesであるといふことができる。

本論では民族言語を研究する立場として、伝統文法学を基礎に議論を展開してきた。アラブ人の作ったアラビア語伝統文法学の中で、本論で問題にしてきた修辭動詞に関わるのはkaanaと'axawaatu kaanaの分類、及びnawaasix構文である。この2つについて言及して、アラビア語における修辭動詞についてまとめてみた。動詞類・名詞類といった語類の分類についても、アラビア語伝統文法学に従った分析をしてきた。アラビア語を分析する場合、やはりその話し手であるアラブ人のつくったアラビア語伝統文法学を無視するわけにはいかない。本論文は前提でも述べた私の言語研究（民族言語研究）の立場が現れたものである。

[略号一覧]

tr = transitive	MV = modifying verb
intr = intransitive	PTCL = particle
DET = determiner	pf = perfect
NOM = nominative	impf = imperfect
GEN = genitive	T = topic
ACC = accusative	C = comment

[List for Symbols Used for Phonetic Transcription and Transliteration]

/ʔ/ voiceless glottal stop	/i/ high front short vowel
/h/ voiceless glottal fricative	/ii/ high front long vowel
/ʕ/ voiced pharyngeal fricative	/a/ low central short vowel
/ħ/ voiceless pharyngeal fricative	/aa/ low central long vowel
/għ/ voiced dorso-velar fricative	/u/ high back short vowel
/ç/ voiceless dorso-velar fricative	/uu/ high back long vowel
/ç/ voiceless velar stop	
/j/ voiceless dorso-velar stop	

/j/ voiced palatal affricate
/sh/ voiceless palatal fricative
/z/ voiced apico-alveolar fricative
/z/ voiced apico-alveolar fricative (emphatic)
/s/ voiceless apico-alveolar fricative
/s/ voiceless apico-alveolar fricative (emphatic)
/t/ voiceless apico-alveolar stop
/t/ voiceless apico-alveolar stop (emphatic)
/d/ voiced apico-alveolar stop
/d/ voiced apico-alveolar stop (emphatic)
/dh/ voiced interdental fricative
/th/ voiceless interdental fricative
/f/ voiceless labiodental fricative
/b/ voiced bilabial stop
/m/ voiced bilabial nasal
/n/ voiced alveolar nasal
/y/ voiced palatal glide (semi-vowel)
/w/ voiced bilabial glide (semi-vowel)
/l/ voiced alveopalatal lateral
/r/ voiced alveopalatal trill

【 謝 辞 】

本論の執筆にあたっては、諸先生にお世話になった。国立民族学博物館の崎山理先生、長野泰彦先生は本研究の主旨を深く理解して、ご指導下さり、執筆に際しては草稿の段階から完成の段階に至るまで、的を得た指摘を下さり、励ましてくださった。また完成に至るまでの各段階で、国立民族学博物館の八杉佳穂先生、庄司博史先生、栗田禎子先生、大阪外国語大学の福原信義先生に大変貴重な御助言を賜った。また友人である山口大学の乾秀行先生は完成原稿に目を通して下さり、筆者の至らぬ不備を指摘して下さった。諸先生に対して厚く御礼申し上げたい。なお本文での不備、誤りは全て筆者の責任である。

【 参考文献 】

- Beeston, A.F.L. 1970. *The Arabic Language Today*. London:Hutchinson.
_____.1984. Reflections on verbs "to be". *Journal of Semitic Studies* XXIX.7-13.
- Bohas, G.;Guillaume, J.-P.& Kouloughli, D.E. 1990. *The Arabic Linguistic Tradition* London and New York:Routledge.
- Bravmann, M.M. 1953. *Studies in Arabic and General Syntax*. Le Caire:Imprimerie de l'institut français d'archéologie orientale.
- Cantarino, Vincento. 1975. *Syntax of Modern Arabic Prose*. Vol.III. Bloomington:Indiana University Press.
- Eisele, John. 1992. 'Egyptian Arabic Auxiliaries and the category of AUX'. In Broselow,E. et al. (eds.). *Perspectives on Arabic Linguistics* IV, 143-165. Amsterdam:John Benjamins.
- Heine, Bernd. 1992. Grammaticalization chains. *Studies in Language*. 16-2, 335-368.
- Jelinek, Eloise. 1983. 'Person-subject marking in AUX in Egyptian Arabic.' In Heny,F.and Richards,B.(eds.). *Linguistic Categories : auxiliaries and*

- related puzzles. Vol.I,21-46, Dordrecht:Reidel.
- Khan, Geoffrey. 1988. *Studies in Semitic Syntax*. Oxford:Oxford University Press.
- McCawley, James. 1988. *The Syntactic Phenomena of English*. Chicago:The University of Chicago Press.
- Levin, Aryeh. 1979. Siibawaihi's View of the Syntactical Structure of kaana wa 'axawaatuhaa. *Jerusalem Studies in arabic and Islam* 1,185-213.
- _____.1985. The distinction between Nominal and Verbal Sentences According to the Arab Grammarians. *Zeitschrift für Arabische Linguistik* 15, 118 - 127.
- Owens, Jonathan. 1989. 'The syntactic basis of Arabic word classification' *Arabica*. Tome XXXVI, 211-234.
- Peled, Yishai. 1989. 'Modifying verbs in full-verb constructions in literary Arabic' In Wexler,P. et al.(eds.) *Studia Linguistica et Orientalia Memoriae Haim Blanc Dedicata*. pp.256-263, Wiesbaden:Otto Harrassowitz.
- Pullum, Geoffrey & Wilson,Deidre. 1977. 'Autonomous Syntax and the Analysis of Auxiliaries'. *Language* 53,741-788.
- Reckendorf, Hermann. 1967. *Die syntaktischen Verhältnisse des Arabischen*. Vol.II. Leiden:Brill.
- Siibawaihi, Ibn 'Uthmaan. 1970. *Al-Kitaab*. (Le livre de Siibawaihi. Traité de grammaire arabe.) Texte arabe publié par Hartwig Derenbourg. 2 vols. Hildesheim,New York:Georg Olms Verlag.
- Steele, Susan et al. 1981. *An Encyclopedia of AUX : A study in crosslinguistic equivalence*. Cambridge : MIT Press.
- Stetkevych, Jaroslav. 1970. *The Modern Arabic Literary Language*. Chicago:The University of Chicago Press.
- Talmon, Rafael. 1981. 'Apposition 'Atf : an Inquiry into the History of a Syntactic Category'. *Arabica* XXVIII, 278-298.
- Wright, William. 1964. *A Grammar of the Arabic Language*. Cambridge:Cambridge University Press.

Summary

O n t h e m o d i f y i n g v e r b i n A r a b i c

Kazuhiko Nakae

In Arabic there are verbs which function as *modifying verbs*. In the traditional Arabic grammar the groups which are classified as modifying verbs are called *kaana* and *'axawaatu kaana* (sisters of *kaana*). These verbs can be used as modifying verbs on the certain syntactic conditions.

The verb *'aada* (in the original meaning 'return') can be used as one of the modifying verbs. In the recent articles this verb is classified as one of the *'axawaatu kaana*. In this article I assert that this (modifying) verb is not one of the *'axawaatu kaana* judging from its syntactic and semantic function.

This verb *'aada* is classified as one of the sub-classes of *fi'l* (verbal word class) apart from *kaana* and *'axawaatu kaana*. In other words *fi'l* (verbal word class) is sub-classified into *kaana* class, *'axawaatu kaana* class, *'aada* class and so on, all of which can be used as modifying verbs on the certain syntactic functions.

Author's address:

Kazuhiko Nakae

School of Cultural Studies

National Museum of Ethnology

Senri Expo Park, Suita, Osaka 565, Japan

(原稿受理日 1993年6月30日)